

学位論文題名

明治期訳語の研究

－対訳辞書および翻訳書を中心に－

学位論文内容の要旨

本論文は、＜対訳辞書の訳語＞(全4章)と＜翻訳書の訳語＞(全3章)とからなる。

第1部の対訳辞書の訳語では、明治期最初の哲学専門の対訳辞書である『哲学字彙』を取り上げる。第1章と第2章では、『哲学字彙』の訳語とはいえ、哲学分野に限らず一般性の強い、つまり幕末明治期に製作された一般的な訳語にも通用できる訳語について考察する。第1章では『哲学字彙』における漢文注記の付いている訳語を対象に、中国古典などに典拠をもつ訳語の定着に何がかかわっているのかを中心に考察を行う。第2章では、『哲学字彙』における学科名注記の付いている訳語を対象に、哲学以外の11学科の訳語について考察を行う。第3章と第4章では、『哲学字彙』初版・再版の訳語を取り上げ、哲学分野における訳語の性格、当時の実状、本書の資料としての意義などを明らかにする。第3章では『哲学字彙』初版における「Eの部」の訳語を対象に、中国古典・国書・対訳辞書との関係、生死語の性格などを考察する。第4章では『哲学字彙』再版における改訂増補された訳語を対象に、当時の訳語の実状、対訳辞書・明治期漢語辞書との関係などの考察を通して再版の性格を明らかにする。

第2部の翻訳書の訳語では、一つの原典に2点以上の訳書が存在する『修身学』と『干涉論』を取り上げ、明治初中期における訳語の変遷を見る。また『哲学会雑誌』では『哲学字彙』との影響関係を明らかにし、両書の訳語資料としての意義を試みる。第1章では明治0年代から明治10年代までに10種類の訳書が出ている『修身学』を取り上げ、訳語の変遷、対訳辞書との影響関係、訳書同士の影響関係などを考察する。第2章では明治10年代から明治20年代までに3種類の訳書が出ている『干涉論』を取り上げ、訳語の変遷を見る。第3章では、明治期最初の哲学関係の雑誌である『哲学会雑誌』を取り上げ、『哲学字彙』との影響関係を明らかにする。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 石 塚 晴 通

副 査 教 授 門 脇 誠 一

副 査 助 教 授 池 田 証 寿

学 位 論 文 題 名

明治期訳語の研究

－対訳辞書および翻訳書を中心に－

第1部の対訳辞書の訳語の第1章では、『哲学字彙』における漢文注記の付せられた訳語を対象に、以下を明らかにした。①『哲学字彙』における漢文注記の付加・削除は、訳語として用いられている漢語の種々の意味とかかわっている。②原語と中国古典の漢語との意味のギャップが、訳語としての定着にどうかかわっているかを見ることができた。③『哲学字彙』は、先行する対訳辞書からは影響をほとんど受けておらず、後続の対訳辞書へ、特に『英和字彙』再版と『和訳字彙』へ大きな影響を与えている。第2章では、『哲学字彙』における学科名注記の付いている訳語（哲学以外の11学科：331語）を対象に、以下を明らかにした。①学科名注記が組織的・体系的に行われるのは『哲学字彙』からであり、後続の対訳辞書では一般的に見られるようになる。②宗教分野の訳語は『英華字典』からの影響が大きいですが、これは、中国が日本より一足先に、英語関係の辞書の編纂や聖書の翻訳などを行ったこととかかわっている。③数学分野の訳語に限って言えば、『哲学字彙』で採用している語は同学科の先行する辞書から影響をほとんど受けておらず、後続の辞書にも影響をほとんど与えていない。第3章では、『哲学字彙』初版における「Eの部」の訳語（119語）を対象に、以下を明らかにした。①対象の訳語は、国書にある用例（70語）より中国古典にある用例（100語）の方が遙かに多い。②国書と中国古典にともに用例のない訳語は、明治期の新造語である可能性が少なくないもので、その種の語は、14語（11.8%）であり、他は原語に訳語を当てる際、既存の語を用いたものである。③『哲学字彙』が先行する辞書から受けた影響はわずかだったが、後続の辞書、特に『英和字彙』再版に与えた影響は大きい。④今から約120年前に制作された辞書でありながら、現在まで生き延びた語（国語辞書および英和辞書にともに載せてあるもの）は40語（33.6%）であり、それは、大体国書および中国古典にともに用例のある語である。第4章では、『哲学字彙』再版における改訂増補された訳語のうち、初版の訳語をそのまま取り入れながら増補したものを中心に考察を行い、次の如き訳語における変遷を明かにした。①四字漢語の増加が目立つ。特にイズムの訳として「主義」の付いた漢語が増えており、「主義」ということばが流行ってい

たことが分かる。②『哲学字彙』再版で増補された訳語は、『英和字彙』初版より『英華字典』からの影響が大きい。③再版で増補された訳語と『訂増英華字典』の訳語とで影響関係が認められる語は4語しかない。

次に第2部の翻訳書の訳語の第1章では、明治0年代から明治10年代までに10種の訳書が出ている『修身学』を取り上げ、以下を明らかにした。①『修身学』の諸本のうち、最初の阿部訳は明治5年に刊行されたものにもかかわらず、訳語の生存率は謝海訳とわずかな差で第2位であり、現代語に与えた影響が非常に大きかったことが言える。②『修身学』の訳書の中には謝海訳と平野訳のように、当時の対訳辞書や先行する訳書からの影響をほとんど受けておらず、独自の訳語を多く用いているものもある。③千村訳は明治15年の訳書にもかかわらず、先に出た訳書に比べて生存率が低い方であるが、これは明治15年頃までに訳語が安定せず揺れていたことを物語る。④山本訳は阿部訳との訳語の一致率が他の訳書に比べて格段に高く、特に山本訳と『英華字典』と一致する訳語(41語)の8割弱は阿部訳とも一致している。第2章では、明治10年代から明治20年代までに3種の訳書が出ている『干涉論』のうち2種(「M13年本」「M26年本」)を取り上げ、以下を明らかにした。①「M13年本」と対訳辞書との関係を見ると、改変のない語のうち生存語では、『英華字典』より『英和字彙』初版と一致する訳語が遙かに多く、改変のある語では『英和字彙』初版より『英華字典』との一致率が高い。②「M26年本」では、時期的に近い『英和双解字典』、『和訳字彙』との一致する訳語が最も多く、『英華字典』や『英和字彙』初版の影響から離れていて、明治20年代になって訳語が比較的安定してきた。③「M13年本」は社会科学分野の訳語を幅広く採用しており、それが対訳辞書および「M26年本」に多く取り入れられ、現在までも生き延びている語が多い。第3章では、明治期最初の哲学関係の雑誌である『哲学会雑誌』を取り上げ、以下を明らかにした。①『哲学会雑誌』の訳語、特に『哲学字彙』編者グループの訳語の場合は、『哲学字彙』初・再版からの影響を大きく受けている。②『哲学字彙』非編者グループ・編集部グループの訳語は、『哲学字彙』初・再版からの影響が相対的に小さく、独自の語を多く用いていることに特徴がある。③『哲学会雑誌』における訳語の生存率は53.2%と高い方であり、特に『哲学字彙』初・再版からの影響を受けた語の生存率はとりわけ高い。

先行研究が比較的少ない中で着実に調査を重ね、上記の如き成果を上げ得たことは評価でき、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しい研究成果であることを全員一致して認める。